
Home Sweet Home

ミナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Home Sweet Home

【Nコード】

N8501Y

【作者名】

ミナ

【あらすじ】

妻を亡くした直輝と、その家にハウスキーパとして働きに行く女子高生有衣。寂しさを抱えるふたりは、やがて…？

目の前に聳え立つ、一見してすぐにそれとわかる高級マンション。18年と少しのこれまでの人生では、あまりに無縁だったそんな建物に、有衣（ゆい）はかなり気後れしていた。

エレガントなその建物とは対照的に、有衣は腕がもげそうなほど重い買い物袋を下げていたからだ。

今日は月曜日。その袋には、6日分の食料品が詰められるだけ詰まっている。

人手不足で清香（さやか）さんの会社に駆り出されて、のこのこと来てはしまったけれど、本当によかったのだろうか。

こんなマンションに住んでいるなんて、一体どんな人が待っているのか。

柄にもなく不安になっていたが、ガードマンの寄こした視線に慌てて、エントランスへ入っていく。

震える手で3301号室のボタンを押し、インターフォンで呼び出すとすぐに応答があった。

「はい」

やわらかな声だった。

有衣は少しだけ、緊張が和らぐのがわかった。

「あの、KSスタッフの川名（かわな）と申しますが」

「ああ、どうぞ。エレベータの脇でもう一度呼び出してくださいね」
「わかりました」

インターフォンが切れ、代わりにロックが外されたドアが開く。

恐る恐る中へ進むと、エレベータホールがあり、エレベータは6基設置されていた。

下層階、中層階、上層階用、そして上り下りの専用それぞれ分かれていたらしい。

31階から上層階用と表示されており、ドアの脇には何かを読み取

るようなパネルと、インタフォン。

そういえばもう一度呼び出して、と言われたのだと思いだして、呼び出す。

「ドアが開いたら乗って、33階へどうぞ。着いたら一番左のドアです」

「わかりました」

少し待っていると、音もなくエレベータのドアが開く。

嚴重なセキュリティの様子に、また少し緊張がぶり返し、不安な気持ちで乗り込んだ。

ゆっくりと上昇する箱の中の有衣は、今から向かう家について頭の中でおさらいしていた。

今まで担当していた坂井（さかい）さんによると、家の主は西岡直輝さん、30歳、3歳の息子晴基くんがいる。

医師で日曜日以外にはほとんど休みがなく、ハウスキーピングが必要なのは平日と土曜日。

主に必要とされているのは食事と晴基くんの世話、掃除と洗濯はついでで良いらしい。

有衣がこの家に来たのは、その坂井さんが産休を取ることになったからだ。

人手不足に困った清香さんが、ちょうど受験も一区切りついて暇だろうと有衣に話を持ち込んだのである。

夏休みも終盤、確かに暇を持て余していたため、断る理由もなく結局行くことに決まってしまった。

我が母親ながらまったく押しの強い人だ、と思い出して小さく溜息をこぼす。

ちょうどそこで目的の階に着いたらしく、上昇が止まって少しだけ浮遊感がした。

エレベータを降りると、ドアは4つしかなかった。

そのドアとドアの間隔は、庶民の有衣からすれば、果てしなく遠かった。

一番左のドアへとにかく向かい、今日3度目のインタフォンを鳴らす。

応答はなく、少しの間のあと、代わりにドアが開けられた。

出てきたのは、男性にしては色の白い、優しそうな目の人だった。

「川名さん？」

「はい。はじめまして」

「こんにちは！」

有衣の声にかぶるように、大きな声が下のほうから聞こえた。

「あ、こんにちは」

挨拶を返すと、にこにこ満面の笑みを浮かべた小さなかわいい男の子。

その顔を見て一気に緊張が解けた有衣は、つられてこちらにもにこにこ笑顔を返した。

その様子を、直輝が少しだけ驚いたように、眩しそうに見たことには、気づかなかった。

玄関に入るとすぐに、さりげなく重たい荷物が引き受けられ、一瞬戸惑ったが促されるまま中へ入った。

広いリビングに通されてソファを勧められ、落ち着かない気持ちで腰を下ろすと、横に晴基が来る。

「ひろみさんよりも、としした？」

「ひろみさん？」

「こないだまで、きてくれてたの」

「ああ、坂井さん。よりも、年下だよ」

「じゃあ、なにちゃん？」

年下だと、ちゃん付けになるのか。

くりくりとした目で期待を込められて見つめられると、こそばゆい気分になった。

「有衣っていうの」

ガチャンッ。

食器が激しくぶつかる音に、キッチンへ目を向けると、信じられない物を見るような目がこちらを向いていた。

何だろう。何かしただろうか。

急に不安な気持ちに襲われて見つめ返していると、やがてぎこちなく視線は外された。

「ゆいちゃん」

小さな声に、有衣ははっとして晴基に視線を戻す。

「かわいいなまえだね」

「ありがとう」

「うん。あのね、おんなのこになまえをきいたらね、そういうんだって」

そんなかわいい言葉に、不安も忘れて思わず吹き出してしまった。こんな小さい子に、そんな言葉を教えるなんて、と思うとおかしくてたまらない。

「誰が教えてくれたの？」

「ほいくえんの、たけせんせい」

秘密を教えるように、ひそひそ声で話す晴基はかわいい。

有衣は一人っ子で小さな子どもと接したことはあまりなかったが、子ども独特の温かさが好きだった。

「じゃあ、今度は私に名前を教えてくれるかなあ」

「うん。ぼくね、ハルだよ」

「ハルくん？」

「うん。はるきっていうの。みんなハルってよぶよ」

頷いたところで、お茶を入れたトレイを持った直輝がこちらへ来る。有衣を見る顔は、最初よりもやや強張って見えた。

「ハル、こっちにおいで」

向かい側のソファに腰を下ろした父親に呼ばれ、晴基は素直に従ったが、その表情には不満が表れている。

晴基は有衣をじつと見ながら、しょんぼりとソファに座った。

黙ってお茶を勧め、言いにくそうに直輝は切り出した。

「君は、名前が…」

少しだけ苦しげにも聞こえた声に、有衣は内心首を傾げていた。

先ほどの派手な食器の音を思い出し、そういえば名前を言っていた時ではなかったか、と思いついた。

「あの、川名 有衣ですが。それが何か…」

「唯一のゆい？」

「いえ。有り無しの有に、衣です」

「…そう」

名前が一体どうしたのだろう。漢字まで聞かれるとは。

固く強張った声の調子と、聞かれていることの不自然さに、有衣はもう少しで取り乱しそうだった。

有衣は、顔を俯けてソファに押しつけていた体をもそもぞと動かし、寸でのところで思いとどまったのだ。

しばらくの沈黙のあと聞こえた声は、最初に聞いたやわらかな声に戻っていた。

そつと窺い見た感じからすれば、表情の強張りも解けたように見え、有衣はほつとする。

それから、一週間のスケジュールややるべきことのリストなどを見せてもらい、大まかな内容を頭に入れる。

その後一通り部屋の中を案内された。

書斎として使っている部屋は、掃除もしなくてよい代わりに、入らないでほしいと言われた。

ベッドルームには、大きなベッドと子どもよしの小さなベッドが並べられていた。

ベッドルームという場所に、有衣は奇妙な緊張を覚え、そんな自分が不思議だった。

最後に、出入りが自由にできるようにと、鍵が渡される。

それは見慣れていた銀色のものではなく、ICカードキーで、使い方を説明してもらわねばならなかった。

エントランス、エレベータ、玄関で、それぞれパネルに翳せばよいということらしい。

いったんだアが閉まるとロックされるため、いつでも持ち歩く必要があるということだった。

なんだか別の世界の出来事のような、不思議な感覚を有衣は味わっていた。

「取り急ぎという感じで悪いんだけど。大体の説明はわかってくれたかな」

「あ、はい」

「多分言い忘れないと思うんだけど」

「なまえ！」

晴基の言葉で、思い出したように笑った直輝は、説明を付け加える。

「苗字で呼ぶのはダメなんだ」

「え？」

「君のことを、有衣ちゃんと呼んでもかまわないかな。苗字で呼ぶと、ハルに直されるんだ」

「…もしかして、坂井さんのこともずっと名前で呼んでたんですか？」

「そうなんだよ。ハルはこういふとこ頑固で困ってる」

情けなさそうに眉を少し下げた顔に、有衣は思わず笑った。

晴基と同じように、ひろみさん、と呼ぶ姿を想像してしまったからだ。

それと同時に自分が、有衣ちゃん、と呼ばれることを考えると、どこかふわふわとした気分になった。

「それと、呼びづらいだろうから申し訳ないんだけど。俺のことも、苗字では呼ばないでくれるかな」

「えっ？ で、でも…」

「苗字で呼ばれるとハルも反応してしまつて、いちいち面倒なんだ。いくら言い聞かせても、ぼくも西岡さんだよ、なんて言つてちつとも聞かないし」

苦いものを嚙んだような顔で話す直輝のそばで、晴基はそれを気にも留めずにこにこと笑っている。

有衣はなんだかおかしくなつてしまつたが、その要求を飲むことにする。

「わかりました。じゃあ、晴基くんはハルくんで、西岡さんは直輝さんで、いいですか？」

「それでいいよ。これからよろしく頼む」

頭を下げられて、有衣も慌てて頭を下げた。

新しいハウスキーパのために、無理に半休を取つたらしい直輝は、説明を終えた後慌てて病院へ出て行つた。

別世界みたいなマンションも、妙な質問も、一瞬の強張つた表情も、気にはなつたが、

このふたりと、特に晴基と過ごすのは楽しそうだ、と思つた有衣は、ここに来てよかったと早くも思つた。

01（後書き）

このお話は、あたたかい雰囲気を目指したいと思います。
どうぞしばらくお付き合いくださいませ。

仕事は夕方から始まる。

まず最初にすることは晴基を保育園に迎えに行くこと。

カメラ付きのインタフォンで到着を告げると、先生が晴基を外に連れてきてくれる。

ここまでしないとイケないとは、本当に物騒な世の中になったものだ、初めて来たときには驚いた。

有衣を見つけた晴基の顔は本当にうれしそうで、その笑顔を見ると有衣も嬉しくなる。

それから、手をつないで一緒にマンションへ歩いて帰る。

そして、夕食の準備をして一緒に食事し、後片付けも一緒にする。

最初はひとりで片づけていたのだが、一度お皿を運んでもらったら、お手伝いが嬉しいらしいとわかったので、

以来ずっと、運べるものはすべて晴基に運んでもらうことにしている。

お皿一枚、コップ一個、と効率は悪いが、一生懸命運ぶ姿は実に微笑ましい。

「上手に運べたね」

「ありがとうね」

運んでくれるたびにそんな言葉をかけてあげると、晴基は嬉しそうにしてますます一生懸命働いた。

食器を洗っている間、晴基は有衣の足もとで本を広げている。

後片付けが終わると、しばらくはお遊びタイムだ。

晴基がはまっているのは、積み木遊びと、レールの上で電車を走らせる遊びだ。

ひととおり気が済むまで遊んだら、晴基が片づけている間に有衣も手早く掃除し、今度は入浴。

さすがに有衣は入らないが、浴室に一緒に行ってあげてお手伝い。

浴槽に入ったら100まで数えるのが、お風呂でのルールらしい。途中つかえながらも数え上げると、どうだ！とばかりの誇らしげな顔で有衣を見上げる。

そんなひとつひとつの仕草や表情が、有衣にはかわいくてたまらなかった。

髪にドライヤをかけてあげて、歯磨きを終えた晴基をベッドルームへ連れていく。

晴基の寝つきの良さには、毎回驚かされる。

ベッドに入って、掛け布団をかけてあげると、ものの2、3分で寝息を立て始めるのだ。

眠る前はぐずぐず子も多いと聞くが、晴基がそうしたことは一度もなかった。

有衣はいつも、晴基が眠るとすぐにベッドルームを出ていく。

最初に感じた奇妙な緊張感が、いつまでも抜けないせいだ。

晴基の小さなベッドの隣の、大きなサイズのベッドが否応なしに目に入るせいで、意識せずにいられなくなる。

このマンションで直輝に会ったのは、最初の1回だけなのに、なぜか気になる。

やわらかな声が耳から離れないし、情けなさそうに笑った顔も、なぜか強張った顔も、脳裏に焼き付いている。

それらを振り払うように、部屋の中を点検し、玄関以外の電気を消して部屋を出る。

そうすると、だいたい夜の8時半を過ぎる頃だ。

家に着くのは9時10分過ぎ頃で、まだ会社にいる清香さんに軽い夜食を作ってあげてから、2階に上がる。

清香さんは忙しい人だったから、家事をするのは慣れている。

それにオプションで晴基が付いてきた、というくらいのイメージで、西岡家での仕事は楽しいものだった。

通い始めて2週間、無味だった夏休みが、気づけば充実していた。

いつも通り帰ろうとした時、携帯を持っていないことに気づいた。どこに置いただろうか、とキッチンやリビングを探し回るうちに、ふと写真が目に入る。

たくさん写真たちの中で、ひと際目を引いた2枚の写真。

直輝と、儚げに笑った綺麗なひとの写真、それからそのひととまだ生まれたばかりと思しき晴基の写真だった。

「ハルくんのママだ…」

どうして今まで気づかなかったのだろう、と不思議なくらい際立って見えた。

有衣はなぜだか、目が離せなくなっていた。

と、急に大音量の着うたが流れた。

まるで悪いことをしていたときのように、有衣の体はびくりと揺れる。

音が聞こえたのは、ベッドルームのほうからだった。

これでは眠った晴基が起きてしまう、と慌ててベッドルームへ向かう。

急いで携帯を床から拾い上げ、ボタンを押して音を止める。

晴基は起きていないように見えた。

けれど、不自然なまでに息を詰めている様子が有衣に伝わる。

「ハルくん」

声をかけると、ぴくりと小さく肩が揺れる。

その様子を見て、有衣は自分が小さなころのことを急に思い出した。父親が亡くなった直後、清香さんを心配させまいと、毎晩よく眠れるふりをしたことがある。

本当はショックで眠れなかったのに、寝ないと清香さんが心配するから、だから必死で寝たふりをしていた。

晴基ももしかしたら、そうだったのではないか、と思った。

「ハルくん。音で起きちゃったかな。それとも、さつきからずっと起きてたかな」

怒っている、と思われぬように、優しく静かに話しかけてみることにした。

晴基は反応を返さなかったが、有衣は辛抱強く待つことにする。

やがて晴基は、もぞもぞと動き出し、寝返りを打って有衣のほうを向いた。

「ゆいちゃん」

「なあに？」

「ぼく、ねてなかったの」

「うん。そっか…」

「おこらない？」

「怒らないよ」

有衣が晴基の頭を撫でてあげると、晴基は照れたように笑った。

それから、不思議そうに有衣の顔を見上げる。

「ゆいちゃん、ぼくがねてなかったの、どうしてしてたの？」

ひろみさんもしらなかったんだよ。ゆいちゃん、すごいねえ」

「うーん…ハルくんと、おんなじだったから、かな」

「おんなじ？」

意味がわからずとも、“おんなじ”という言葉には惹かれるらしい。

晴基は少しだけ、嬉しそうな顔をした。

「ハルくんにはママがいらないんだよね」

「うん。ママはしゃしんだけなの」

「私にはね、パパがいらないんだ。パパが、写真だけなの」

「パパがいらないの？ ぼく、パパはいるよ。」

ゆいちゃんは、パパがいなくて、かわいそうね…」

晴基の無垢な言葉が、有衣の心に染みた。

片親がいらないという事実は同じなのに、自分にはいる父親が有衣にはいいことがかわいそうだと言う晴基。

「ハルくんは、優しいね」

「やさしいと、うれしい？」

「うん。嬉しいよ」

「じゃあ、いっぱいやさしくなる！」

あのね、ゆいちゃんパパがいなくてかわいそうだからね、ぼくがゆいちゃんのパパになつてあげるよ」

「ふふ、ありがとう」

とってもいいことを思いついた！と言わんばかりの口調に、有衣は思わず笑顔になった。

小さい子どもの考えることは、とてつもなく大きい。

でも優しさが嬉しくて、かわいくて、こんな小さなパパができるのもいいかもしれない。

有衣は幸せそうにほほ笑んだ。

「それでね。ゆいちゃんは、ぼくのママになるの」

「えっ？」

そのとんでもない言葉に、有衣の表情は一瞬強張った。

晴基が有衣のパパになる、という言葉とは、持つ意味も重要度も、次元のまったく違うものだったからだ。

「いつもじゃなくていいの。ぼくがおねがいしたら、そのときだけママになつて」

それでもけな気に言い募る晴基に、有衣はどうしても頷かざるをえなかった。

多分、晴基は母親がいらないという自分の特異性を、保育園という小さな世界だけでも十分に感じているだろう。

その疎外感を、たとえその場しのぎだとしても、少しでも軽くしてあげたいと有衣は思った。

「じゃあ、ハルくん。ひとつだけ約束できるかな」

「なあに？」

「今のお話はね、パパには内緒にするの」

「どうして？」

「うん。パパが悲しくなるかもしれないから。」

ハルくんがパパに秘密にできるなら、それならハルくんがなつてほしいときに、ママになつてあげる」

晴基は、しばらくうーん、と悩んでいたが、やがて笑顔になつて頷いた。

なぜ直輝が悲しくなるのかわからない様子だったが、有衣が承諾したことの嬉しさのほうに勝つたらしかった。

安心したところで眠気が襲つてきたようで、晴基は小さなあくびを何度もする。

それでも、目を閉じたらすぐに有衣がいなくなつてしまふと思い、近くにあつた有衣の左手をぎゅっと掴んだ。

「ハルくん。ここにいてあげるから、眠くなつたら寝てもいいんだよ」

「…うん。いてね。やくそくだよ」
「約束」

すぐにでも眠つてしまいそうだったが、それでも晴基の小さな手は有衣の左手を掴んで離さない。

有衣はその小さな手に、余っていた右の手をそつと載せてあげた。ゆつたりとあやすように、その手を撫でてあげるうちに、晴基はやがて本当に眠りに落ちた。

晴基が眠つて、10分ほど経つた。

いつもならすぐに帰るところだが、今日は帰れないでいた。

晴基の優しさと、内にある寂しさに触れて、しかもここにいてあげる、と約束してしまったから。

せめて直輝が帰ってくるまでは、いてあげなければいけない気がしたのだ。

そういえば、直輝がいつ頃帰ってくるのか、有衣は知らなかった。いつも晴基がどれほどの時間この部屋でひとりきりで過ごしていたのか、知らなかった。

そして、晴基のことを考えるその片隅で、直輝に会いたいと思つて

いる自分がいることも、否定はできなかった。

02（後書き）

今回は、“有衣とハル、心の絆ができる”の巻でした。

ハルは大まじめに言っていました。が、実際ハルがパパだといろいろ大変そうです…（笑）。

まだひとり蚊帳の外の直輝。

この人が何を考えているのか、早く書きたいな、ということで、次回へ続く！です。

時刻は午後9時半を回っていた。

直輝はタクシーを急いで降り、足早にマンションに入っていく。

晴基が寝た後は、ハウスキーパは帰ることになっている。

そのため晴基が寝てから直輝が帰るまでの間、必然的に晴基はあの部屋にひとりということになる。

自分で出している条件ではあるが、実のところ直輝はそれが心苦しかった。

今はそんなことはなくなったが、最初の頃の晴基は、直輝が帰ると部屋で泣いていたものだ。

それでも今でさえ晴基はたった3歳であり、辛い思いをさせているに違いないのだ。

ただ、あまり遅くまで拘束するとハウスキーパ自体が派遣されないことが多いため、我慢させてしまっている。

ロックを外して玄関のドアを開けると、明るかった。

いつもは玄関の小さな明かりだけがついているのだが、今日は廊下もリビングの照明もついている。

消し忘れていったのだろうか、珍しい。

そんなことを思いながら脱いだ靴を仕舞おうと視線を下げると、小さなミユールが目に入った。

ということは、まだ帰っていないのか。それこそ珍しいことだ。

直輝は、一度だけ会った新しいハウスキーパを思い浮かべた。

初めて部屋に来た時の緊張のかたまり、そして晴基の顔を見て一気にはころばせたその表情。

その劇的な変化の瞬間は、とても眩しく感じた。

年齢を聞いたことはないが、少なくとも自分よりは5つ以上は下だ

ろうと予想している。

若そうに見えるのに、料理はうまく 実のところひろみさんよりうまかったし、仕事はしっかりしている。

あまり重きを置かなくてよいと言った掃除も洗濯も、一通りこなしてくれている。

そして何より、晴基の懐きようが普通でない。

ひろみさんのことも大好きだったようだが、今回はそれ以上、いや比にならないほどだ。

朝食のときも、日曜の休みのときも、ずっとと言ってよいほど一緒に過ごした時間の話をしている。

そのせいで、一度しか会っていないのに、もう何度も会ったような気分になるほどだった。

それにしても、名前には驚いた。

ユイというのは、直輝の亡くなった妻と同じ名前だった。

初めて有衣の名前を聞いた時には思わず動揺してしまったが、今はそのことを少し後悔していた。

よくよく考えてみれば、べつに特別珍しい名前でもないのだから、同じ名前の人がいてもおかしくはない。

それに、あの時有衣が見せた不安な表情が、直輝の脳裏に焼き付いていた。

幼ささえ感じるような痛々しさのようなものが見えた気がして、自分がひどく悪いことをしたような気になった。

胸が痛んだ、といってもいい。

唯が亡くなった後の直輝の心の動きとしては、それは非常に珍しいことだった。

しかし直輝はまだ、その事実を自覚してはいなかった。

目に入る範囲に有衣の姿はなく、かわりにテーブルの上に盛りつけられたから揚げの皿が載っている。

書斎は入らないように言っているから、有衣がいそうな場所に残りはベッドルームだけだ。

直輝は、自分のベッドルームであるにもかかわらず、なぜか若干の緊張を覚えてうろたえた。

そつとドアを開けると、晴基のベッドのそばに人影。

晴基の手を握りながら、ベッドにもたれかかっているのは。

「ゆ……」

唯、と言いそうになったところで、眩暈に似た感覚に襲われ、直輝は一度目をつぶった。

閉じた瞼の裏で、なぜ唯だと思ったのだろう、と思ったがわからなかった。

もう一度目を開いて同じ光景を見ると、そこにいるのは、確かに有衣だった。

どうしてか起こすのは躊躇われた。

良識的に考えて、帰すべき時間だということはわかってはいたが、直輝はそうしなかった。

晴基の寝顔が、安心しきっているように見えたせいもある。

晴基と、一緒になって眠ってしまった有衣、ふたりの姿にどこか胸が詰まった気がしたせいでもある。

それがどうしてか、直輝はわからなかったし、分析しようとも思わなかった。

とにかく有衣をそのままに、ベッドルームの扉をそつと閉め、直輝はバスルームへ向かった。

かすかに水の音が聞こえ、有衣は身動きした。

はつと意識が覚醒を促し自分がどこにいるのかを理解すると、さつと血の気が引いた。

あのまま晴基と一緒に眠ってしまったのだ。

しかも聞こえてくるこの音は、つまり家の主が帰ってきていること

を示しているに他ならない。

「ばか……！」

小声で自分を罵り、慌てて立ち上がろうとするが、晴基の手がまだしがみついたままだった。

少しかわいそうに思いながらもそつと小さな手を少しずつ剥がしたが、晴基は起きなかった。

ふりではないその眠る様子に安心して、リビングへ向かう。

時計を見ると、もう10時近くだった。

本来ならとうに家にいる時間と、思いの外長く眠っていたらしいことに気づき有衣はぎよつとした。

直輝がいつ帰ってきたのかはわからないが、玄関にあるミュールに気づかないはずはない。

それに、帰ってきてまず晴基を確認しないわけがない。

ということは、一緒になって寝こけていた自分の姿も一緒に見ただろう。

そんな風に簡単に推察できることを思い浮かべ、有衣はつい大きく溜息をついた。

帰らなければと思ったが、勝手に帰るわけにもいかない。

かといって、何もせずにただここで直輝を待つというのもおかしいことだ。

とりあえず清香さんに遅くなりそうだとメールを打ちながら考える。

直輝は食事をしてきたのだろうか。

晴基がひとりで待っていると思えば、仕事の後外で食事はしてこないだろう。

そう思い、ひとまず直輝の食事の準備をすることにする。

器に盛ってあった直輝の分をテーブルから手に取ると、当たり前だが冷めきっている。

今まではずっとレンジで温め直して食べていたのだろう、と思うと

なぜか切ない気持ちになった。

この広い部屋で、ひとりで食事をする考えると、寂しい。どうせなのでもう一度揚げ直してしまう。

夜遅いことを考えて大根をおろし、調味料を混ぜてタレを作ってあっさりめに仕上げたところで直輝が戻った。

バスルームから出た直輝は、キッチンから聞こえてくる物音に目を瞬いた。

有衣が起きたらしい、と思いながらリビングへ戻ると、キッチンで料理をしている有衣が目に入る。

いつもは自分で温め直している料理を、今日は有衣が温め直してくれているらしい。

キッチンで自分以外の誰かが働く姿を見るのは、かなり久しぶりのことだった。

しかも自分のために、と思うと直輝は素直にうれしかった。

「ありがとう」

カウンタ越しに声をかけると、有衣は少し気まずそうな、はにかんだ顔で振り返った。

「あの、すみません。うつかり寝ちゃって…」

「いや、いいよ。疲れてたんだろ。それより、時間大丈夫かな」

「あ、大丈夫です。メールしたので…」

そこで直輝はふと、誰にメールしたのだろう、と思った。

帰りを心配する誰かが、いるのだということが、引っかけたのだ。そんな自分の反応を初めて認めた直輝は、しばし呆然としてしまった。

テーブルに着いた直輝は、皿の上にあるものがさきほどまでのものと違うのに気付いた。

ただのから揚げだったものの上に、大根おろしと何やらタレが載っている。

この短時間の間に、自分のためにまたアレンジしたのだ、とわかり直輝は驚いた。

「いただきます」

お茶を入れてくれている有衣に向かって言うと、嬉しそうに笑う。そんな有衣の表情に、あたかなものを感じながら、直輝は箸を進めた。

直輝が食べ終わるのを待ってから、有衣は少しだけ緊張しながら切り出した。

「あの、ハルくんのことなんですけど」

「ハル？ 何か、悪さしたとか…？」

「いえ違います。やっぱり、少しの時間でもひとりにはできないと思っただけです。」

あの、つまり何が言いたいか、といいますと。

ハルくんが寝付いて、直輝さんが帰ってくるまで、ここで待っててもいいですか？ ということなんですけど」

直輝は、その言葉に驚いて有衣を見つめた。

ずっとそうしてほしかったが言えなかった条件を、有衣のほうから口に出したことが俄かには信じ難かった。

「どうして、そう思うの？」

「実は、今日初めて気づいたんですけど。…ハルくん、寝たふりをしてたんです。」

寝つきがよすぎるな、とは前から思ってたんですけど、ずっと気を遣ってそうしてきたみたいなんです」

それは初めて知った事実だった。

いつからかぱったりと、泣かずにベッドで眠っているようになった晴基。

“ふり”だったのかと思うと、なんてかわいそうなことをしていたのだらう、と胸が潰れそうに痛かった。

そして、それに気づいてくれた有衣のことがとてもありがたく、そ

の温かさが心に染みた。

「ああ…それで、今日はハルと一緒にいてくれたんだね」

「はい、あの…寝てしまうつもりはなかったんですけど」

しゅん、としてしまった有衣を見て、直輝は吹き出してしまいそうになった。

それでも晴基のことをこんな風に思ってくれているのがわかって、嬉しい気持ちになる。

「それはいいんだ。むしろそんな風に、ハルのことを思ってくれてありがとう。」

有衣ちゃんの提案は、俺としては願ってもないことだけど、決めるのは会社を通してからにしよう」

受け入れてくれそうな雰囲気、有衣はほっとした。

時刻はかなり遅くなっていたが、晴基がいるため直輝が有衣を送ることはできない。

直輝が電話でタクシーをマンションの下に呼び出すのを、有衣は断ろうとしたが直輝は聞かなかった。

有衣はタクシーのお礼を言って、玄関から出ていく。

「それじゃあ…おやすみなさい」

ドアが閉まる間際、“さようなら”の代りに有衣の口を衝いて出た挨拶。

その言葉が、直輝の中には温かい衝撃としてひろがった。

誰かに、そう言ってもらったのは…もうどれくらいぶりかわからなかった。

「…おやすみ」

ドアが閉まった後の玄関に、有衣の耳には届かなかった直輝の小さな声が響いた。

03（後書き）

視点がころころ変わるので、読みにくい方いらっしゃるかもしれませんが。ごめんなさい。

ハルを軸に、だんだん直輝と有衣が無意識下で近づいてきました。やっぱり、さみしいときには、あたたかいぬくもりが一番効くのですよね。

ちなみに有衣が作ったから揚げにのつけたおろしダレは、大根おろしに、お酢と醤油とみりんと一味とネギが入ったものです。揚げものでもさっぱりいただけただけでお勧めです

夏休みも終わり学校が始まると、一日はものすごく忙しくなった。朝から学校、終わると一度家に戻って制服を脱ぎ、晴基を迎えに行つて、一緒にスーパーへ買い物に行く。

そして夜まで西岡家で過ごし、遅い時間に家に戻って、翌日もその繰り返し。

清香さんも心配するハードな生活だが、有衣は楽しんでた。むしろのめりこんでいる、と言つてもいいほどだ。

学校のない土曜日でさえ、家にいられず午前中から会社でそわそわしだすという筋金入り。

土日だけ清香さんの会社でバイトをしている幼馴染みのみどりにも、それを見られてしまった。

「あんまり深入りしないようにね」

そんなふうに釘を刺されるくらいには、呆れられている。

有衣の提案と直輝のお願いに、清香さんはあつさりうなずいた。

実は自分も昔有衣をひとりにしていたことを、かなり気にしてきたからだ。

有衣がそういう言うのなら、とすぐに了承したのを受け、直輝は何度も頭を下げた。

直輝は料金も上乘せすると言つたが、有衣があまりに固辞するので清香さんがやんわりと断つた。

ただ、そのかわり、直輝は有衣に月曜日のまとめ買いをやめてほしいと注文した。

一番最初に会つた時の、重い荷物を両手からぶら下げてふらついていた有衣を覚えていたからだ。

月曜日に一気に増える冷蔵庫の中身が、土曜日までにどんどん消えていくのは不思議な楽しみがあったが、

それでもあの重そうな姿を考えると、ずっと気の毒で仕方がなかった。

どうせ必要経費は直輝がすべて出すことになっているのだから、とそれだけ頼んだのだ。

一回一回買つと割高になると思ったが、あの重さから解放されるのは素直にありがたい、と有衣も了承した。

そんなわけで、今日も晴基と一緒に買い物だ。

「ゆいちゃん、きょうは、なにかう？」

「今日はねえ、かぼちゃが安売りなんだよ」

「かぼちゃ。ぼく、すき」

「ハルくん、チーズも好きだったよね？」

「うん。のびるの」

「じゃ、今日はかぼちゃのグラタンにしよう」

手をつないで店の入口まで歩き、カートに晴基を載せて中へ入った。晴基と一緒にマンションの近くのスーパーに買い物に行くようになって早3週間。

自然と顔なじみになる店員も増えてくるわけで。

入ってすぐの場所にある野菜コーナーへ行くと、よく顔を合わせる店員が近づいてくる。

晴基をかわいがってくれて、よく晴基に声をかけてくれるのだ。

「いらっしやい。今日のごはんは何かな」

「きょうは、かぼちゃのぐらたん！」

「そうかー。ママがお料理上手だといいねえ」

「うん！ なんでもつくれるの」

すっかり親子として認識されていることに、有衣はいつもながら戸惑いを感じる。

いいのだろうか、と思いつつも、晴基が嬉しそうに受け答えるので、つい何も言えずにいた。

店員が晴基と話をしてくれている間に、有衣は特売のかぼちゃと、

ほうれんそうを手取る。

カートに放り込むと、店員に挨拶してその場を離れた。

とりあえず、今日必要なものはこれだけだ、とレジへ向かうとすると、晴基が手をぽんと叩く。

「ゆいちゃん、おかし」

「あ、そつか。今日は土曜だもんね」

嬉しそうにする晴基をかわいいと思いながら、お菓子のコーナーにカートを進める。

保育園のお友達から、買い物に行くたびに1つだけ好きなものを買ってもらえる、という話を聞いたらしい。

お願いされた有衣は、毎日是不くはないかなと思い、月木土と間を開けながら買ってあげることにしたのだ。

といつても、晴基はいつも100円もしないものばかりを選ぶ。

また遠慮しているのかと思ひ聞いてみたが、そうではないという。

どうやら“母親に買ってもらえる”という気分を味わえればそれでいいらしい。

つまり、スーパーにいるときは、晴基が有衣に“ママになってほしいとき”なのだ。

だから有衣はいつでも、内心の戸惑いを晴基の前ではひた隠しにして買い物をした。

戸惑いの理由には別の面もある。

直輝が会社から帰った後、清香さんは意味ありげに有衣を見た。

「有衣もそんな年頃かあ」

「…どんな年頃よ」

意味わかんないんですけど、と小さな声で付け足す。

「えゝ？ わかんないならいいわよ」

軽く清香さんは言ったが、本当は有衣にも少しはわかっていた。

西岡家での仕事が楽しいのは、純粹に晴基だけを気にかけているからではないのだ。

それに加えて、夜の遅い時間帯に、直輝と過ごす時間がある。

直輝が帰ってきてから食事の用意をし、直輝が食べるのを見ながら他愛もない話をする。

その時間は、あたたかく、有衣の心にすうつと入り込んでくる。

そんな状態で、外で晴基の“ママ”を演じるのは、自分にとってよいこととは思えなかった。

みどりに言われたことと、ほぼ大差ないことを清香さんにも言われていた。

「ああいう人は、難しいところあるから。気をつけなさいね」

けれど、気をつけていてもいなくても、結局心の動きには既に抗えなくなっている気がした。

いつかカンチガイな行動に走ってしまいそうで、今の有衣は戸惑いと同時に少しの恐怖を抱えている。

物思いにふけりながら晴基の体の水滴をぬぐっていると、晴基がバスタオルから逃げ出した。

「あつ、こら！ ハルくん！！」

追いかけると、きゃーきゃー言いながら晴基が走って逃げる。

お風呂に入れてあげた後、晴基と追いかっこになるのはいつものことだ。

拭き終わらないうちに逃げるせいで、床にはぼたぼたと落ちた雫で道しるべができる。

ソファの上に行こうとした晴基を、寸でのところで抱きとめた。

「濡れたままソファはダメ！ これ皮なんだから」

「かわってなに？」

「水に濡れちゃいけないもの。もうダメだよ、ハルくん。ちゃんと拭いて服着なきゃ」

「はい」

捕まればおとなしくなり、それからは逃げようとはしない。

晴基にとっておそらくゲームの一種なのだが、有衣はほとほと困っ

ていた。

「床の濡れたところ、ハルくんが拭くんだよー」

「わかったー」

でも素直に言うことを聞く晴基には、思わず笑顔が浮かぶ。

ちよつとのわがままくらい、許してあげちゃう気になるのだから、晴基の威力は大きい。

今日は園で遊び疲れていたのか、いつもより早く眠気が襲っていたようだった。

ベッドに入って、晴基の手を握ってあげるとすぐに晴基が眠つたのを見て、有衣は満足げに息をついた。

かわいくて、あたたかくて、いとしい存在だ。

寝顔を見てなごんでいると、聞きなれた電子音とドアの開閉音が聞こえた。

晴基から手を離し、起きないことを確認してから、有衣は直輝を迎えに行った。

「おかえりなさい」

有衣の姿を認めた直輝は、やさしい笑みをこぼした。

「…ただいま。ハルはもう寝ちゃった？」

「はい。なんだか、遊び疲れちゃってたみたいですよ」

「そっか」

土曜日は、直輝の帰りが少しだけ早い。

だからいつもなら、晴基も有衣と一緒に直輝を出迎えるのだ。

直輝の少しだけ残念そうな顔を見て、有衣の心は痛んだ。

それをごまかすように、お風呂を促した。

ちょうどグラタンが焼きあがったところ、直輝がバスルームから戻ってきた。

その濡れた髪から雫が時折ぽたぽたと垂れているのが見えて、有衣はこっそり笑った。

晴基と同じだ、父子ってこんなところまで似るのか、と思ったのだ。そんなことを思われているとは露知らず、直輝はキッチンに入り、冷蔵庫からビールを取りだす。

すると、冷蔵庫の中にジョッキが冷やされているのを見つけて、直輝は驚いた。

「…これ、有衣ちゃんか？」

「あ、今日は土曜日だから…飲むかなと、思ってた」

直輝の驚いたような顔が目に入り、有衣はなんとなくこそばゆい気分になった。

一緒に過ごしたこれまでで、土曜だけは直輝がビールを飲むことに気づいて、今日は準備してみたのだ。

気づいてもらえたことが、嬉しかった。

「お料理、運びますね」

なんだか恥ずかしさに居たたまれない気持ちになり、有衣は直輝のそばをすり抜けていく。

どこかふわふわした心地で、直輝はテーブルに着いた。

冷蔵庫の中のジョッキを目にした時に感じた何かが、まだじわじわと直輝の中に息づいていた。

そこに、どこかへ行っただと思っただけの有衣が、タオルを手にして戻ってくる。

「あの、髪まだ濡れてます…」

タオルを差し出されて、直輝は自分の顔に熱が上るのがわかった。

週に一度、日曜日にだけお風呂に一緒に入る晴基のことを思い出した。

晴基も自分も、大してきちんと拭きもせずには歩きまわっている。

晴基を毎日のようにお風呂に入れている有衣には、きっと似ていると思われた、と思うと気恥ずかしかった。

タオルを掴むと、お互いの指先が一瞬触れた。

直輝は内心ぎくりとし、有衣も内心ぎよつとしたが、ふたりとも表

には出さない。

ぎこちなく手が離れて、直輝はタオルで頭を覆った。

触れ合った指先が、熱かった。

04（後書き）

これぞ、“疑似家族”な感じになってきました。
直輝よりも一足先に、有衣の中では恋愛感情が育ってきてる模様です。

ちなみに直輝はまだ無自覚。
しかもそのうえ臆病と鈍感のダブルパンチ^^；
どうなることやら、です。

さて、今回のかぼちゃグラタン。
普通のホワイトソースに、味噌をちょびつと入れるのがコツです。
具はかぼちゃと玉ねぎと彩りのためにほうれん草。
チーズはたっぷりめで、ばっちりです。

晴基を迎えに行くと、今日は笑顔が二倍だった。

武先生に手をつながれて、小走りに近づいてくる。

「こんにちは」

「ゆいちゃん！」

武先生と晴基の声がかぶり、有衣は笑って挨拶を返した。

ちなみに武先生とは、例の、女の子に名前を聞いたら云々を晴基に教えた、あの“たけせんせい”だ。

最初会った時はかなり若く見えて驚いたが、逆にこの若さならあのレクチャーもあり得る、と有衣は思った。

晴基は、左手を武先生とつなぎ、右手に何か紙を持っている。

先生と挨拶を交わし、晴基を引き受けると、晴基は有衣に右手の紙を差し出してきた。

「はい、ゆいちゃん。あのね、おうちのひとにみせてね、っていわれたの」

「ありがとうね」

おうちの人は、厳密には直輝のことなのだが、まあいいか、と有衣は受け取る。

それは運動会のお知らせだった。そういえば、そんな時期か。

歩きながらお知らせをめくると、晴基の組のお遊戯の部についても書かれている。

「ゆいちゃんもくるでしょ？」

「うーん…パパに聞いてみないとね」

きつと、一生懸命でかわいいんだろ？なあ、と見に行きたく思ったが、勝手に返事をするわけにはいかない。

今日は金曜日で、直輝の帰りはいつもと変わらず遅い。

晴基が寝た後では言い出しにくいし、明日まで待とう、と有衣は算段した。

相変わらず、夜の時間はあたたかい。

晴基の世話をして、晴基が眠るときにはベッドのそばで座っている。手に触れる晴基の体温は、有衣よりも少し高く、心地よい温かさだ。その穏やかな時間は、直輝が帰ってくるまで続く。

直輝が帰ると、今度は直輝がお風呂に入っている間に食事を用意し、一緒にテーブルに着く。

晴基の話をするときもあれば、直輝の病院の話をするこゝもあつた。そうして、晴基と過ぐすのとは少し違ふ、べつの穏やかな時間が流れる。

今日の直輝は、テーブルの上にあつた運動会のお知らせを見ている。

「土曜日なんですね。お休み取れそうですか？」

「ああ、なんとかするよ」

「お遊戯とか、きつとかわいいですよ。楽しみですねえ」

想像してみても笑顔で話す有衣を見ると、直輝は思わず言つてしまった。

「よかつたら、有衣ちゃんも行く？」

「え？」

驚いた有衣の顔を見て、直輝ははつと我に返つた。

こうして一緒に時間を過ごしていると、つい忘れてしまふのだ。

有衣は、お金を払つて家に来てもらっている、単なるハウスキーパなのだということを。

「あ、いや、ごめん…。俺が休みの日まで来てられないよね」

言い出しにくかつたことを直輝から言つてもらえて驚いただけだつた有衣は、慌ててしまつた。

「ち、違います！ 行きたいなあつて思つてたところに誘つていただいて驚いたんです。」

ハルくんも来てつて言つてくれたんですけど、直輝さんの考え次第だと思つてたので、あの…嬉しいです」

凄い勢いで直輝の言葉を否定し、最後に遠慮がちに嬉しいと言った有衣を、直輝は素直にかわいいと思った。

決して変な意味ではない、と思ったが、それでも胸が軽く締め付けられたような妙な痛みを感じていた。

「ありがとう。じゃあ、一緒に行ってくれるかな」

「はい」

笑顔で返事をした有衣を見ながら、直輝は自分の胸の痛みにも内心首を傾げた。

有衣が運動会に行けると聞いて、晴基の機嫌は底抜けによかった。ずっとうきうきして、お風呂に入るにも食事を取らせるにも、落着かせるのが大変なほどだった。

直輝が帰ったら、有衣の運動会行きを確かめるのだと、ずっと玄関を気にしていたが、

テンションが高すぎて体は疲れていたらしく、満腹になるとうつらうつらしてしまっただけだった。

「ハルくん、ベッド行く？」

「いけない。パパ、かえってくるの、まってる」

言いながらも、夢と現実の世界を行ったり来たりの晴基に、有衣は苦笑した。

「じゃあ、ソファでひと眠りしようか。パパが帰ってきたら起こしてあげるから」

「うん。やくそくね。おこしてね」

「約束」

有衣が約束すると、ようやく何も言わずに目を閉じた。

脱力してかなり重く感じる晴基を抱きかかえて、有衣はソファへ移動して自分も座って晴基を横にならせる。

落ち着かない晴基の世話には、有衣も少し疲れを感じていた。

どうせ後片付けも部屋の掃除も一通り終わっている。

直輝が帰ってくるまで自分も休ませてもらおう、と有衣も目を瞑っ

た。

水の音が聞こえた気がして、有衣ははっと目を覚ました。

聞こえていたのは、シャワーの水音と、窓に吹き付ける雨の音だったようだ。

「雨降ってるんだ…。あ、っていうか、また…！」

シャワーの音が聞こえるということは、直輝が帰ってきているということだ。

晴基と一緒にになってまたしても眠ってしまったて気づかなかった、ということに有衣は慌てた。

晴基を起こさないようにそつとソファから立ち上がり、急いで直輝の夕食の支度にとりかかる。

フライパンを火にかけていると、晴基が起きてきてキッチンの入口に立った。

「ゆいちゃん」

「あ、起きた？ パパお風呂入ってるから、もう少し待ってようね」「うん」

返事をしながら、晴基は有衣の近くに寄ってきて、そばにある椅子に座る。

本当は危ないからキッチンには入らせたくないが、離れているのが寂しいらしく、仕方なくそのままにしている。

「あれ？ ぼくがたべたのと、ちがうの？ あかいね！」

「そうだねえ。パパの分は辛いのが入ってるんだよ」

こんな風に有衣が料理をするのを、不思議そうに面白そうに見ている晴基が、かわいくもあつた。

バスルームのドアが開く音に、晴基は飛び上がるように反応した。

「パパ！」

「お、起きたかあ？ ただいま」

「おかいり」

「おかえりなさい。すみません、また…」

「ははっ、いいいいよ」

笑いながら、直輝は冷蔵庫を開け、ビールと有衣の冷やしたジョッキを取り出す。

当然のように冷やされたジョッキと、当然のように取り出す動作が、直輝にも有衣にも温かいものを感じさせた。

有衣は直輝の濡れた髪を思わず盗み見るが、今日も零れる雫はなかった。

前にタオルを渡した時以来、直輝はよく拭いて出てくるようになった。

それを少し残念に思ったりしてしまうことに、有衣は少なからず苦いものを感じた。

直輝が帰って、晴基のハイテンションぶりは復活していた。

運動会のお知らせを持ってきて、食事をする直輝に纏わりついている。

嬉しそうな晴基に、直輝も有衣も目を細めていたが、晴基の話はだんだんよくない方向へ行き始めていた。

「ゆいちゃん、あのね」

「なあに」

「みんなね、ママがおべんとつくるんだって」

有衣は、この晴基の言葉にぎくりとした。

スーパーで買い物の時に好きなものを買ってもらっ、という話をしたときと同じ語り口だったからだ。

あのとき晴基は有衣に、だからママになって、と言ったのだ。

直輝の前ではまずい、と慌てて晴基の名前を呼ぼうとしたが、間に合わなかった。

「だからね。ゆいちゃん、ママになって。それで、おべんとつくって？」

有衣は、ひゅっ、と息を吸い込んだ。

直後、直輝がテーブルに箸を置く、無機質な音が響いた。

しん、と静まり返ったとき、晴基ははっとなった。

ママになる話は直輝の前では内緒だ、と約束したのを思い出したのだ。

凍りついた有衣の表情を見て、晴基は急に不安になって、有衣のスカートをぎゅっと握りしめた。

「どういう意味だ？」

聞いたことのないような、直輝の低く硬い声に、晴基はびくりと体を揺らした。

有衣も、晴基と一緒にになってびくりとしたが、晴基がかわいそうで、スカートを握る手をそっと握ってあげる。

「ハル、どういう意味だ、今の」

晴基は、恐ろしくなってしまう、何も言えなかった。

晴基と有衣の手をちらりと見て、直輝は今度は有衣に向き直る。

「君の様子だと、ハルがこういうことを言うのは、初めてじゃないんだね」

君、と言われたところに、他人行儀な雰囲気を感じて、有衣は心まですで凍りそうになった。

けれど、すっかり怯えてしまっている晴基を矢面に立たすまいとして、有衣は事実を少ししか伝えなかった。

「わ、私が言っただけです」

「…何を？」

「ハルくんの、ママになってあげる、って…」

言った途端、直輝は派手な音を立てて椅子から立ち上がった。

晴基は、おろおろと目をさまよわせながら、ますます強く有衣のスカートを握りしめる。

直輝は有衣の目の前に立ち、晴基の手から乱暴に有衣の手を剥がし、晴基の手を有衣のスカートから外した。

その態度に、有衣は目の前が暗くなっていくのを感じた。

「君は自分が一体何を言ったのか、わかってるのか？」

ハルの母親だって？ ハルの母親はひとりしかいないし、誰も代わりになんかなれないんだ。

君がそんなことを考えてハルに接していたのかと思うと、怖くなつたよ。

悪いが、帰ってくれないか。今後のことは、会社を通して相談させてもらうことにする」

一気に突き刺さってきた言葉は、押し掛かるような重さを伴っていた。

有衣は俯いて、涙をこらえるだけで必死だった。

「すみませんでした」

やっとのことでそれだけ口に出すと、立ちあがってお辞儀し、鞆を掴んで玄関へ足早に向かう。

「ゆ、ゆいちゃん！ ゆいちゃん！！」

悲鳴に近い声が何度も有衣を呼んだが、直輝が抑えつけているため、晴基は追いかけられない。

靴をはく頃には、有衣はすでに涙をこらえてはいられなかった。

玄関に、ぼたぼたと、零れた涙が染みを作る。

心の中で晴基に謝りながら、ドアを閉めると、晴基の呼ぶ声も聞こえなくなった。

05（後書き）

ちよつと波が立って、直輝と有衣の間に溝ができてしまいました。というか、直輝が勝手にキレちゃったんですけど…。

これだから、無自覚と臆病と鈍感のトリニテイ男は^^；

さて、今回お料理名は出しませんでした、チヂミでした。

ハル用には普通ので、直輝用にはキムチを入れて辛めに。

有衣は土曜日はビールに合うものを基本に作ってるんです。

なのに直輝はちつとも気づかず、こんな風にキレてしまって…どうしようもないですね。

ドアが閉まった瞬間、張りつめていた気持ちが途切れた。

直輝は半ば茫然となり、晴基を抑えつけていた手から力を抜く。

その途端、晴基は玄関へ走り出したが、有衣はもう行ってしまったのだ。

「ぎゃああん!!」

部屋に響いたのは、およそ晴基のものとは思えない、今までに聞いたことのないような泣き声だった。

泣き声よりも、叫び声に近い。

その声に現実に取り戻された直輝は、晴基を連れ戻しに玄関に行った。

「ハル」

晴基はドアに向かって立って、泣いていた。

名前を呼ぶと、ひくり、と肩が揺れる。

晴基を抱き上げようとしゃがみこむと、下がった視線が玄関の床を捉えた。

点々とした黒い染みが、何かを悟った時、直輝の心臓は擦られたような痛みを感じた。

その痛みがあまりにも強かったので、直輝は思わず自分の左胸を押さえ込んでしまったほどだ。

けれど、自分が言ったことは間違っていない、と直輝は思い直す。痛みを忘れようと、頑なに頭を振る。

「ハル、戻ろう」

さきほどまでの、怯えた晴基を思い出した直輝は、意識して優しい声を出そうとした。

晴基は涙に濡れた目で、だが強く直輝を睨みつける。

「きらい」

その小さな口から発せられた言葉に、直輝は一瞬固まった。

今まで、一度も聞いたことのない言葉だった。

「ぼくが、パパ…。ゆいちゃんは…」

泣きながら話す晴基の言葉に、要領を得ない直輝は溜息をつく。落ち着いてからまた話を聞こう、と直輝は抵抗する晴基を抱え込んで、リビングへ連れ戻した。

夜遅くにチャイムが鳴り、ドアを開けたみどりは驚いた。

頭のとっぺんから靴まで、ずぶ濡れになった有衣が立っていたのだ。

「今日、泊めて」

「いいけど…」

みどりは慌てて有衣を中に引き入れ、バスタオルを渡す。

濡れていたのは外見だけではない、赤い目に盛りあがる水を見て、みどりは内心溜息をついた。

「清香さんに連絡した？」

「携帯、置いてきちゃった…」

今日はハウスキーパの仕事の日だったはずだ、今の有衣に、どこにとは聞けなかった。

「連絡しとくから、とりあえずお風呂入りなよ」

「ありがと」

しばらくしてお風呂場から聞こえてきた、有衣のすすり泣く声に、みどりは今度こそ溜息をもらす。

何かある度に、以前から有衣はみどりの家に泊まりに来ていた。

清香さんに心配をかけたくないのだ。

心配そうに顔を出した両親に、大丈夫だと伝えてから、みどりは清香さんに電話をした。

何かあったらしいことに清香さんも気づき、溜息をついたのが感じられたが、ひとまず外泊の承諾を得る。

父親が早くに亡くなったせい、有衣が年上の男性に憧れることが多いのは、みどりも知っていた。

けれど、子供までいる人を本気で好きになるとは、みどりも思っていないかったのだ。

泣きながら雨に濡れて帰ってきた有衣のことを思うと、みどりは言いようのない気持ちになった。

温かいお湯につかりながら、有衣は止め処なく落ちる涙に、途方に暮れていた。

直輝が捲し立てた言葉が、もうずっと何度も頭の中で繰り返されている。

有衣は、直輝の言い分が正しいことを知っていた。

確かに自分は、“母親”になろうとしていたということを、認めている。

晴基に頼まれて、晴基を気遣って、そうなるうとしていた面は確かにある。

けれど、晴基だけを思ってたのではないことには、今日より前に既に気づいていた。

それはつまり、晴基の本当の母親に代るものになりたいと思っていた、ということだ。

晴基にとってだけでなく、直輝にとってのそれにも、なりたいたいと思っていたのだ。

だからこそ、直輝の言葉が、こんなにも痛いのだ。

まるで無数の剣で突き刺されたかのように、有衣の心は夥しい血を流している。

それが、涙になって流れているような気がした。

今の有衣は、それをとどめるすべを知らない。

ようやく涙が止まってきたころ、浴槽のお湯は、どこかぬるく感じられた。

お風呂から出てみどりの部屋に行くと、心配そうな顔が有衣へ向けられる。

「ごめんね」

「…いいから」

軽く溜息をつきながら、みどりは有衣をドレッサーの前に座らせる。そしてドライヤを取り出し、有衣の髪にかけてやった。

有衣は気持ちよさそうにみどりにまかせていたが、そのうちまた新たな涙が盛り上がる。

「深入りするな、って言われてたのにね」

ドライヤの風の音で、有衣の声はみど리にはつきりとは聞こえない。だが唇の動きは、ばかだよ、と言ったように見えた。

有衣の気持ちを想って、みどりの胸は痛んだ。

直輝は、リビングでひとりソファに背を預けて、遅々として進まない時計の針を眺めていた。

その後ろの窓に、雨が叩きつける音が聞こえている。

直輝が帰ってきたときに既に降り始めていた雨は、有衣が出て行った頃にはひどくなっていたはずだった。

いつも直輝が呼ぶタクシーも、今日はなし、有衣は傘も持っていなかった。

帰る頃には、全身がずぶ濡れになってしまったに違いない。

晴基はとうに泣き疲れて眠ったが、直輝はとても眠る気にはなれないでいる。

テーブルの上には、有衣が作った料理が冷めた食べかけのまま載っていた。

有衣が冷やしたジョッキに入ったビールも、半分以上残ったままだ。きつと気が抜けて、ぬるくなっているだろう。

それを横目で見ながら、直輝は自分の言動を思い返した。

なぜ、あんな言い方をしてしまったのだろう。

腹が立ったから？　だが、自分は何にそんなに腹が立ったのか。

唯の代りに晴基の母親になると言ったことが、だろうか。

そう考えたところで、直輝は思わず呻くような声を漏らした。
唯の代りにだつて？ 有衣は、そんなことは一言も言わなかった。
有衣はただ、晴基の母親代わりになる、と言っただけだった。

つまり、有衣を唯の代りにするというのは、自分が考えていたことなのだ。

自分が無意識に思っていたことを言われて、凶星を指されたような気になって、怒りを感じたのだ。

直輝は、思い当たったその理由に、心臓が押しつぶされたような衝撃を受けた。

「…ばかな」

口を衝いて出た言葉が、空々しく聞こえて、直輝は頭を抱えた。

あるとき、直輝は有衣の手を晴基から乱暴に引き剥がし、怒りをそのまま言葉でぶつけた。

それを思い出すと、そのときの有衣の表情の記憶がありありと浮かんだ。

目を睜つた後、すぐに俯いてしまった有衣は、口を固く引き結んでいたのだ。

多分、涙をこらえていたのだ、と今ならわかる。

玄関にできた染みは、こらえきれないで落ちたものたちなのだ。

それを見たときに感じた胸の痛みが、また直輝を襲う。

自分のしてしまったことの大きさに打ちのめされて、直輝は重たい溜息を吐きだした。

髪を乾かし終えて、有衣とみどりはベッドに入った。

みどりのベッドは大きい。

それは、みどりの快適さのためというよりも、時折こうして有衣が泊りに来た時のためだった。

だからみどりのベッドは、小さなころからかなり大きなものだった。そのベッドに、ふたりで並んで横になる。

そしてみどりは、いつも有衣が話し出すのを辛抱強く待つのだ。

しばらく経ってから有衣は、ぼつりぼつりと話し始める。

始めから、直輝のことが気になっていたこと。

晴基がとてもかわいかったこと。

晴基のさみしさを、自分はよくわかってあげられると思ったこと。

晴基が交換条件のように、パパやママになることを無邪気に約束してくれたとき、嬉しかったこと。

戸惑いながらも、晴基の“母親”を演じるのは楽しかったこと。

晴基と直輝と過ごした夜の時間帯は、あたたかかったこと。

いつの間にか、本当に代りになりたいと思っていたこと。けれど、直輝に言われた言葉。

「私って、バカだよ。ムリに決まってるのに……」

話しながらまた泣いてしまった有衣は、ひしゃげた顔になりながらも、なんとか笑おうとした。

みどりは、何も言葉を見出せず、ただそっと有衣を抱きしめてやった。

隣でようやく眠りについた有衣を確認して、みどりはそっとベッドから下りた。

部屋を抜け出し、下の階のリビングルームまで行くと、みどりは携帯を取り出す。

既に日付は変わり、深夜とっていい時間帯だったが、みどりは頓着しなかった。

有衣の姿に胸を痛めると同時に、清香さんの事務所で一度見たことのある相手の男に怒りを感じていたのだ。

有衣をあれほど傷つけておいて、まともな神経の人間なら、すぐに眠れるはずはない、とも思っていた。

もっとも、眠っているとしても、起こしてやるとは思っていたが。みどりは、出ないだろうとは思いつつ、有衣の携帯をコールした。

突然、けたたましい音がすぐ傍で鳴り響き、直輝は驚いてその音源を凝視した。

直輝の座るソファの隅に、何度も目にしたことのある有衣の携帯が置きっぱなしになっていた。

有衣のその忘れものに、今初めて気づいた。

有衣は、取りに来るだろうか。

僅かに期待を抱いている自分自身を自嘲しつつ、きっと有衣は来ないだろう、とも予想した。

逡巡している間に、呼び出し音は途切れる。だが、間をおかずにまた鳴り出す。

勝手に出るわけにはいかないが、いつまでも鳴るままにしておくわけにもいかない。

直輝は、そつと携帯を手の中に引き入ると、電源を落とした。

単なる機械にすぎないのに、直輝は無意識に、それに有衣のぬくもりを探していた。

06（後書き）

同時進行ぼく、ちゃんと書きたかったのですが。
場面の変遷がちゃんと伝わってるでしょうか…。
なんか、微妙な感じになってしまいました…。

とりあえず、直輝は自覚しました。

でも、その自覚をどう生かせるかな…みたいな^^；
そんな感じで、溝が埋まるのはもう少し先のような気がしますね。

そして、今回ほぼ新キャラ。

幼馴染みのみどりの参戦です。いつでも有衣の強い味方です。
でも、いくら怒ってても夜中に悪戯電話は、ほんとダメですよ〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8501y/>

Home Sweet Home

2011年11月29日22時45分発行